

学生相談における面接回数についての検討： 学年，相談内容，援助方法との関係

佐藤 静香^{1)*}，吉武 清實¹⁾，池田 忠義¹⁾，高野 明¹⁾，長尾 裕子¹⁾

1) 東北大学高等教育開発推進センター

1. 問題と目的

学生相談の相談援助活動には，学生相談がもつ諸特徴が影響を及ぼしている。学生相談の特徴として，大学教育の一環である点であること，学内の相談機関で行なう相談活動であること，入学から卒業までという限られた期間の中での活動であること，学生の大半が青年期に位置していることなどがあげられている¹⁾²⁾。

こうした特徴に伴って，学生相談には，単位や履修に関する情報を求める相談，心理面の苦しさ，対人関係や進路など，多様で幅広い相談が寄せられる³⁾。学生による学生相談の利用の仕方も様々であり，全体としては少数回の利用者が多いが⁴⁾，入学直後から卒業に至るまで面接を継続する長期利用者もいる。また，面接中断後も再び来談したり不定期に来談したりする学生が少なくない一方，退学や卒業によって面接終了を余儀なくされる場合も生じる^{5) 6)}。学生相談カウンセラーは個々の相談内容に応じて，カウンセリングに加えて，情報提供や心理教育的な対応，危機状況への積極的介入，他部署との連携などを行なって援助している。

学生相談の面接回数に関する研究として，鶴田⁷⁾，森田⁸⁾，石谷⁴⁾，長田⁶⁾によるものがある。鶴田⁷⁾は卒業期来談学生を精神的健康の水準によって，少数回面接者が多い「自己確認型」や「情報探索型」，多数回面接者が多い「自己探求型」，「内面整理型」，「現実生活混乱型」等に分類し，面接で行なわれる心理的作業の違いを考察した。森田⁸⁾は入学時の相談室のイメージが肯定的であった学生は相談室を拠り所として長期的に来談するが，否定的であった学生は少数回

で終了することを見出した。石谷⁴⁾は，相談事例を面接回数によって初期・短期・中期・長期の4つの相談群に分類し，初期・短期相談では，学生生活への適応に関する实际的援助を行い，中期・長期相談では，学生の心的成長のサポートや安心できる場の提供を行なっていることを考察している。長田⁶⁾は，面接継続回数と継続期間を相談内容と来談時期別に分類し，修学，進路，対人などの相談は比較的短期の面接で対応可能であるが，心理，精神保健相談は長期の対応を要すること，学部生において学年別の特徴があること，長期不定期来談者は，相談室を心理的安定の拠り所とし，相談室と相談室外を行き来しながら現実社会で生きる力を得ていく特徴があることを考察している。

これらの研究において，面接回数や面接期間による面接作業の分類や相談室の役割の違いが考察されてきた。しかし，面接回数や面接期間の検討を通して，学生相談の臨床的特徴や課題を捉えるためには，さらなる知見の積み重ねが必要である。とくに，これまでの面接回数に関する研究において主な対象者は大学生（学部学生）であり，大学院生は対象に含まれていても事例数が少ない。大学院生について面接回数から見た相談援助活動の特徴を明らかにすることも必要である。

そこで本研究では，初回来談時の学生の学年，相談内容およびカウンセラーの援助方法と面接回数との関係を検討することを通して，学生相談における相談援助活動の特徴について考察することを目的とする。

*) 連絡先：980-8576 宮城県仙台市青葉区川内41 東北大学高等教育開発推進センター

2. 方法

(1) フィールドの概要

10学部、15大学院からなる、学生数約18000人（大学生約11000人、大学院生約7000人）の総合大学の全学向けの学生相談機関である。本研究の対象となる2003年度～2006年度中にカウンセラーの異動があったため、面接を行なった延べカウンセラー数は常勤6名、非常勤4名であった。開室日は週5日で、お盆期間と年末年始の各1週間を除いて長期休暇期間中も開室していた。

(2) 対象

この学生相談機関に2003年度～2006年度の4年間に来談し、面接を終結または中断した学生1968名（男性1340名、628名；大学生1376名、大学院生526名）の相談記録データである。面接の終結・中断は、学生の卒業、修了、退学によるものを含む。2007年度も面接継続中の学生、家族、教職員等は対象に含めなかった。面接以外の方法による相談や、個別相談以外のグループ・居場所としての利用も対象から除いた。

(3) 調査方法

各年度の相談記録に基づき、以下の項目について集計・分析を行った。援助方法のカテゴリである「療学援助」は人数が3人と少なかったため、「その他」に含めた。相談内容の具体例を表1に示した。

1) 面接継続回数：一人の学生に面接を行った回数

面接回数は石谷⁴⁾に基づき、「1回」、「2～3回」、「4～10回」、「11～30回」、「31回以上」に区分した。ただし石谷⁴⁾では「1～3回」を「初期相談」としてひとまとまりにしているが、本研究では1回の面接の人数が多く特徴的であったことから、「1回」は独立のカテゴリとした。仮に週1回のペースで面接を行った場合、10回以内は1セメスター期間内での来談、11～30回は半年～1年の来談、31回以上は1年以上にわたる来談とおおよそ想定できるが、実際には面接の頻度はさまざまであり、来談期間にも幅が見られた。

2) 来談時の学年：初回来談時の学生の学年

3) 相談内容：初回来談時の相談内容

①進路修学：進路及び修学に関する相談

②心理性格：自己の心理状態や性格に関する相談

表1 相談内容の例

相談内容	例
①進路修学：進路および修学に関する具体的相談 ・進路選択 ・進路変更 ・進学 ・学業 ・就職	・履修方法について知りたい ・単位をとっていない ・転部、再受験について知りたい ・就職への不安 ・授業や研究室に行けていない ・研究がうまくいかない
②心理性格：自己の心理状態や性格に関する相談 ・心理的不適応 ・自己の性格の理解 ・アイデンティティの形成	・自分に自信がもてず、人と会うのが苦痛 ・いろいろなことでいっぱいいっぱいになっている ・精神的に不安定で気分の浮き沈みが激しい ・やる気がおきない ・自分が本当は何をしたいのかわからない
③対人関係：具体的対人関係に関する相談 ・家族関係 ・異性関係 ・友人関係 ・教職員との関係	・親との葛藤 ・失恋して気持の整理がつかない ・心を開いて話せる友人がいない ・指導教員とうまくいかない ・研究室の先輩に嫌がらせをされている
④心身健康：心理面・身体面の健康上の問題に関する相談 ・精神障害への対処 ・身体障害・身体疾患への対処 ・病的レベルの心理的混乱 ・性や妊娠	・過食嘔吐がやめられない ・不安で眠れないことがよくある ・被害妄想・幻聴がある ・自傷・自殺未遂 ・うつ状態で何事にも気力がわからない
⑤学生生活：学業以外の学生生活上の問題に関する相談 ・課外活動 ・経済的問題 ・住居 ・アルバイト ・交通事故・悪質商法	・サークル活動に時間がとられすぎている ・携帯電話への架空請求・ワンクリック詐欺にあった ・新聞の契約をクーリングオフしたい ・交通事故を起こしてしまった ・宗教団体の勧誘を断りたい ・親がリストラされ、経済的に苦しい

- ③対人関係：具体的対人関係に関する相談
- ④心身健康：心理面・身体面の健康上の問題に関する相談
- ⑤学生生活：学業以外の学生生活上の問題に関する相談
- ⑥その他

4) 援助方法：初回来談時のカウンセラーの援助方法

- ①教示助言（情報提供）：情報提供や紹介など現実的レベルのガイダンスによる援助
- ②教育啓発：心理教育的援助
- ③心理面接（心理のみ）：カウンセリングによる援助
- ④心理面接（医療と連携）：医療と連携した状況でのカウンセリングによる援助
- ⑤危機介入：緊急の援助を必要とする者への積極的援助
- ⑥コンサルテーション：家族・友人等、学生の関係者が抱える問題への対処のしかたに関する援助
- ⑦その他

3. 結果

(1) クロス表による検討

来談時の学年、相談内容、および援助方法ごとの各面接回数の人数と割合を表2に示した。面接回数と学年、面接回数と相談内容の二つのクロス表について、人数の偏りを検討するため、それぞれ χ^2 検定を行った。分析の際には、人数の少なさから博士1年から博士3年をまとめて一つのカテゴリとし、来談学年、相談内容、援助方法における「その他」のカテゴリは除いた。 χ^2 検定の結果はいずれも有意であった（ $\chi^2(24) = 99.23, p < .001$; $\chi^2(16) = 186.54, p < .001$ ）ため、調整済みの残差を算出し残差分析を行った。面接回数と援助方法のクロス表は期待度数5未満のセルが30%あったため、 χ^2 検定は行なわなかった。結果は表2に示したとおりである。

全体を概観すると、平均面接回数は5.3回であり、1回の面接で終えた来談者は全体の48%、2～3回面接した者は23%、4～10回は17%、11～30回は8.7%、31回以上は3.4%であった。学生の多くは少数回の来談となっているが、多数回にわたって来談している者

もあり、面接回数は幅広く分布していることがうかがえた。

1) 来談時の学年と面接回数の関係

来談者に占める学年の割合としては、1年生が最も多く全体の31%を占めていた。2年生～4年生はそれぞれ12～14%、修士学生はそれぞれ約10%、博士学生が6%を占めていた（図1）。

表1より来談時の学年と面接回数の関係をみると、1年生では1回の面接で終わった人数が59.6%と際立って多かった。31回以上来談した者も2.3%いたが、平均面接回数は3.9回と他の学年に比べて最も短かった。

2年生は面接回数の比率において、平均的な比率を示していた。3年生では1回の面接が40.2%と比較的少ない上、31回以上が5.9%と他の学年に比べて最も高く、多数回来談する者が多くなる傾向がみられた。4年生では11～30回が13.7%と、全体の比率に比べて多かった。

修士1年では、平均回数が7.6回と全ての学年の中で最も多かった。修士2年は4～10回が21.9%と全体の比率に比べて多く、来談して1年以内に修了する場合が多かったと考えられる。博士の学生では11～30回が13.7%と全体の比率に比べて多かった。

以上の結果から、1年生は1回の面接で終わる者が多く、3年生、4年生、修士1年、博士では、11回以上来談する者の割合が多くなる傾向にあることがうかがえた。

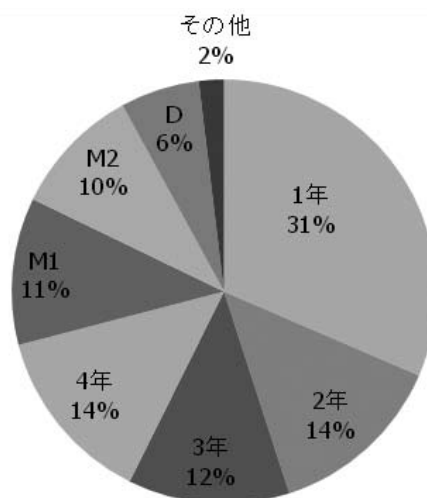


図1 来談時の学年の割合

表2 面接回数と来談学年、相談内容、援助方法のクロス表

		学年						注2) 合計		相談内容						合計	援助方法						合計
		1年	2年	3年	4年	M1	M2			D	進路修学	心理性格	心身健康	対人関係	学生生活		(心理面接のみ)	(心理面接と連携)	(情報提供)	教育啓発	危機介入	コンサルテーション	
1回	人数	364	133	96	120	70	77	51	911	485	82	70	83	196	916	426	30	415	33	5	23	932	
	% 残差分析 ^{注1)}	59.6 +	50.6	40.2	45.5	32.6	40.1	43.6	47.9	53.2 +	24.9	38.7	37.9	71.0	47.8	36.7	22.9	76.7	67.3	38.5	54.8	48.1	
2－3回	人数	131	62	63	49	61	53	24	443	199	95	43	61	49	447	314	29	82	11	3	8	447	
	% 残差分析	21.4	23.6	26.4	18.9	28.0	27.6	20.5	23.3	21.8	28.9	23.8	27.9	17.8	23.3	27.0	22.1	15.2	22.4	23.1	19.0	23.1	
4－10回	人数	75	39	45	51	45	42	20	317	129	81	37	47	27	321	240	38	31	4	2	7	322	
	% 残差分析	12.3 －	14.8	18.8	19.3	20.6	21.9	17.1	16.7	14.2	24.6	20.4	21.5	9.8	16.8	20.7	29.0	5.7	8.2	15.4	16.7	16.6	
11－30回	人数	27	21	21	36	29	16	16	166	74	51	21	19	3	168	134	21	10	1	2	3	171	
	% 残差分析	4.4 －	8.0	8.8	13.7	13.4	8.3	13.7	8.7	8.1	15.5	11.6	8.7	1.1	8.8	11.5	16.0	1.8	2.0	15.4	7.1	8.8	
31回以上	人数	14	8	14	7	12	4	6	65	24	20	10	9	1	64	47	13	3	0	1	1	65	
	% 残差分析	2.3	3.0	5.9	2.7	5.5	2.1	5.1	3.4	2.6	6.1	5.5	4.1	0.4	3.3	4.0	9.9	0.6	0.0	7.7	2.4	3.4	
合計		611	263	239	263	217	192	117	1902	911	329	181	219	276	1916	1161	131	541	49	13	42	1937	
平均回数		3.9	4.5	6.7	5.9	7.6	5.1	6.7	5.4	4.6	8.7	6.9	6.3	2.0	5.3	6.4	11.2	2.1	2.0	6.9	4.3	5.3	

注1) + 期待度数よりも観測度数が大きい (p<0.05)
 - 期待度数よりも観測度数が小さい (p<0.05)

注2) 分析中「その他」のカテゴリを除外しているため合計の数値が異なる

2) 相談内容と面接回数の関係

初回相談内容では、「進路修学」が全体の46%を占めていた。次いで多かったのが「心理性格」(17%)で、「学生生活」(14%),「対人関係」(11%)と続いていた。「心身健康」は9.2%であった(図2)。

表1より相談内容と面接回数の関係をみると、「進路修学」では1回の面接が53.2%と多かったが、多数回にわたって来談を続けるものも少なくなかった。「心理性格」は、平均回数8.7回と他の相談内容に比べて最も多く、多数回来談する者が多かった。「学生生活」では1回の面接で終わる割合が72.2%と多かった。「対人関係」は4～10回が22.3%と全体の比率に比べて高く、平均回数は6.3回であった。「心身健康」も複数回にわたって来談する者が多く、平均回数は6.9回と「心理性格」に続いて多かった。

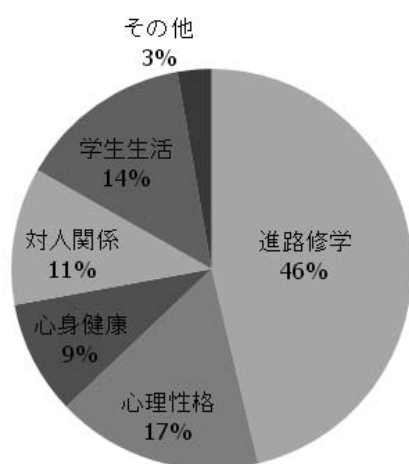


図2 初回相談内容の割合

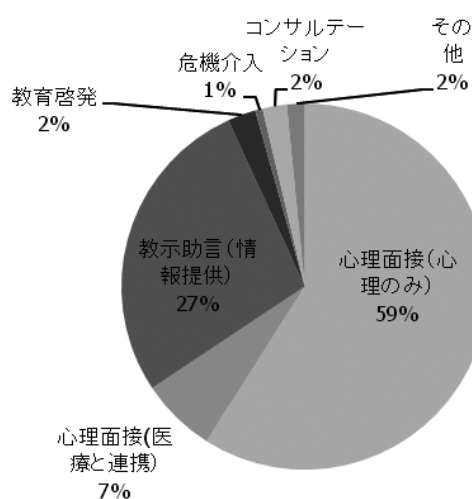


図3 初回援助方法の割合

3) 援助方法と面接回数との関係

初回援助方法では、「心理面接(心理のみ)」が59%を占めていた。次いで多かったのが「教示助言」(27%)であり、「心理面接(医療と連携)」(6.7%),「教育啓発」(2.5%),「コンサルテーション」(2.1%)と続いた。「危機介入」は0.7%であった(図3)。

援助方法と面接回数の関係をみると、「心理面接(心理のみ)」または「心理面接(医療と連携)」では面接が多数回になる割合が高く、「教示助言」・「教育啓発」では1回の面接が多かった。ただし「教示助言」や「教育啓発」で始まる面接でも、11回以上継続した者もいた。「危機介入」や「コンサルテーション」も1回の面接が多いが、多数回となる場合もあった。平均回数では、「心理面接(医療と連携)」が11.2回と最も多かった。

(2) 多重コレスポネンシス分析による検討

面接回数、来談時の学年、相談内容、援助方法の各変数を構成するカテゴリについて多重コレスポネンシス分析(数量化Ⅲ類)を試みた。多重コレスポネンシス分析は、複数の質的変数を構成するカテゴリを多次元空間の点として表し、点間の距離によってカテゴリ間の関連の強さを表現する方法である。本研究では、面接回数の各カテゴリが、来談時の学年、相談内容、援助方法の各カテゴリと、どのような関係をもっているかを視覚的に捉えるために、この分析方法を採用した。累積寄与率(82.5%)から2次元を採用した。結果をまとめたものが図4である。なお、図中の円は説明のために加えたものであり、それぞれ、面接回数1回の点、2～3回の点、4～10回の点、11～30回の点、31回以上の点を中心とする円である。

図4を見ると、原点近くには、「進路修学」や「2年生」のカテゴリがある。多重コレスポネンシス分析のプロットの特徴として、度数が多いカテゴリや全体の比率に近いカテゴリは原点近くに、度数の少ないカテゴリは原点から離れてプロットされる傾向がある。このことから、「進路修学」は、すべての学年・面接回数・援助方法に共通して多い相談内容であるため原点近くに位置しており、初回面接時から医療と連携する場合は数としては少ないため「心理面接(医療と連

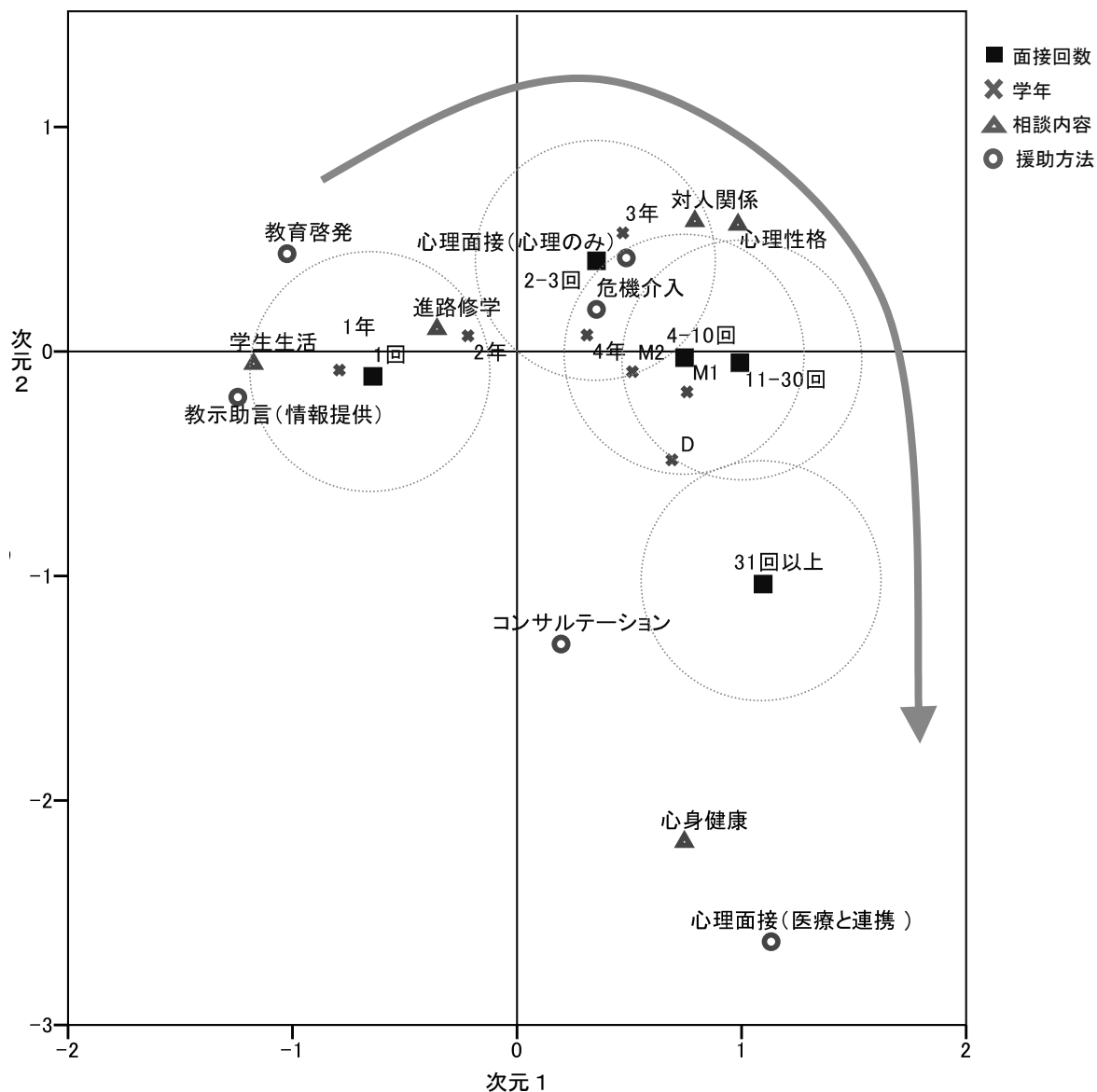


図4 面接回数と来談時の学年・相談内容・援助方法の関連（多重コレスポンデンス分析のプロット）

携)」は原点から離れて位置していると解釈できる。また、「2年生」は全体の比率に近いため原点近くに位置していると解釈できる。

面接回数1回の点は図の左側に位置しており、面接回数が増えるにしたがって、図の左側から右上、さらに右下へと面接回数の点が移動していることがわかる(図中の矢印)。面接回数の点の移動にほぼ対応する形で、学年も1年から博士(D)までプロットされており、大きく見ると、学年が上がるほど、面接回数が増える傾向にあることが示唆される。同様に、面接回数の点の移動に対応して、相談内容は、学生生活、進路修学、対人関係、心理性格、心身健康の順に、援助方法

は、教示助言、教育啓発、危機介入、心理面接(心理のみ)、心理面接(医療と連携)の順にプロットされ、この順で面接回数が増える傾向にあることが示唆された。

面接回数カテゴリの点ごとに近接するカテゴリの点を見ていくと、面接回数1回は、学年では1年生、2年生、相談内容では「学生生活」、「進路修学」、援助方法では「教示助言」のカテゴリの点と近接していた。2～3回は、学年では3年生、4年生、相談内容では「対人関係」、「心理性格」、援助方法では「心理面接(心理のみ)」、「危機介入」と近接していた。

4～10回と11～30回は相互に近い位置にあり、4年

生から博士,「対人関係」,「心理性格」,「心理面接（心理のみ）」と近接していた。

31回以上とは接近するカテゴリはなかったが、他の回数よりは「心身健康」や「心理面接（医療と連携）」との距離が近い傾向にあった。

これらの結果から、学年、相談内容、援助方法は面接回数と関係しており、入学期の学生による学生生活上の問題や修学上の初期適応に関する相談は、具体的情報の提供によって1回の面接で終わることが多いが、学年が上がり相談内容が複雑かつ深刻になるほど、多数回の面接回数となる傾向が示唆された。

4. 考察

(1) 面接回数の特徴について

面接回数の特徴として、1回の面接で終えた来談者が全体の48%と、他の研究（27.6%⁶⁾、23.0%⁴⁾）と比べて多かったことがあげられる。1回の面接における相談内容も、心理的内容が半数近くを占めていた長田⁶⁾や心理テストでの来談が大半であった石谷⁴⁾とは異なり、本研究では、その多くが1年生または2年生による「学生生活」または「進路修学」の相談であった。

こうした面接回数の特徴には、学生のニーズと学生相談機関の特徴とが反映していると考えられる。すなわち、本学生相談機関では毎年新入生を対象として行なっている意識調査を行なっているが、「学生相談所で相談したいこと」という質問における回答の上位は、「勉強、単位取得」(26.8%),「将来の進路」(20.1%),「一人暮らし」(14.1%)であり、「自分の性格」(5.0%)や「身体の健康」(4.5%)を上回っている⁹⁾。こうした学生のニーズに対応して、学生相談機関では、入学式やオリエンテーションでの利用案内や予防教育としての授業を通じた予防・広報活動を行い、学生が気軽に利用できるように努めると同時に、心理面への支援に限定せず、学内教職員と連携して問題解決への現実的支援を行っている。そのため、現実的な問題に関する支援を求める相談が多いと考えられる。またこのことは、そうしたニーズに対応する学内の他の相談窓口や支援体制が十分に整備されていない現状の反映でもある³⁾。こうしたことから、学生相談における面

接回数には、学生のニーズ、学生相談機関の特徴、さらには全学的な学生支援体制が影響を与えているといえる。

(2) 面接回数の観点からみた相談援助活動の特徴

多重コレスポネンス分析の結果から、面接回数の観点から、学生相談における相談援助活動を4つのグループに分類することができそうであると考えられた。そこで、相談内容の具体例をあげながら、面接回数ごとに相談援助活動の特徴について検討する。

面接回数1回のグループは、1年生、2年生、「学生生活」,「進路修学」の相談,「教示助言」による援助と相互に近接していた。1回の面接の相談内容の例としては、「携帯電話への架空請求にどう対応したらいいか」,「交通事故を起こしてしまった」といった学生生活上の問題や,「履修方法について知りたい」,「転部・再受験について知りたい」といった学業の初期適応に関する内容が見られた。1回の面接では、こうした相談に対して具体的な情報を提供したり手続きを手伝ったりすることで、現実的な問題の解決や大学生活への初期適応の援助が行なわれていたと考えられる。

2～3回のグループは,「対人関係」や「心理性格」,「心理面接（心理のみ）」や「危機介入」と相互に近接していた。相談内容の具体例としては,「失恋の苦しみ」や「友人・恋人との付き合い方」,「やる気が出ない」,「社会に出るのが怖い」,「卒業単位が足りない」といった、人間関係の悩みや比較的短期間の不適応感、あるいは即時の対応を必要とする事態に関する内容が見られた。2～3回の面接では、こうした相談に対して、気持ちの整理や安定、対人スキルの向上、危機状態を乗り越えるための援助が行なわれていたと考えられる。

4～30回のグループは、高年次学生（4年～博士課程学生）,「心理性格」や「対人関係」,「心理面接（心理のみ）」と相互に近接していた。具体的には,「何もしたくない」,「人と会うのが苦痛」,「指導教員とうまくいかない」,「将来どうしたらいいかわからない」といった、長く続いている不適応感、対人関係のトラブル、進路の模索といった相談内容が含まれた。こうした相談に対して、相談員が継続的に関わり、心理面の安定や自己理解の促進をはかる援助が行なわれていた

と考えられる。高年次学生になるほど面接回数が多くなるのは、相談内容がより遷延化・複雑化し深刻なものが多くなるためであると考えられる。とくに大学院生は、研究生生活に関わる具体的困難を抱えて来談しており、日常生活や将来に直結するため相談への意欲が高いことや、研究室中心の生活で気軽に悩みを相談できる相手が身近に少なくなることから、学生相談を一定期間継続的に利用する傾向にあると考えられる。

31回以上のグループは、他のグループに比べると「心身健康」の相談、「心理面接（医療と連携）」による援助との距離が近づいた。心理的苦痛を抱えている学生や精神症状をもつ学生に対し、面接初期から医療機関と連携しながら長期的に関わり、学生生活の継続を支えていたと考えられる。

このように面接回数の観点から相談援助活動を分類してみると、より日常的な相談からより専門的対応を必要とする相談まで、間口の広い相談援助活動が展開されているといえる。

近年、日本学生支援機構がとりまとめた調査報告書「大学における学生相談体制の充実方策について」¹⁰⁾では、大学における学生支援・学生相談体制の望ましいあり方を検討するための基本的考え方として、以下の3点を提示している。①教育の一環としての学生支援・学生相談という理念に基づき、教職員と学生相談カウンセラーとの連携・協働によって学生支援を行なう。②学生の多様化という現状を把握し、学生の個別ニーズに応じた学生支援を提供できるよう大学全体の学生支援力を強化する。③日常的な学生支援、制度化された学生支援、専門的な学生支援の3階層モデルによる総合的な学生支援体制を整備する。学生のニーズが多様化する中で、総合的な学生支援体制が十分に整うまでの間は、学生相談カウンセラーが対応する範囲は日常的な学生支援から専門的な学生支援まで幅が広がると考えられる。学生相談カウンセラーには、変化する個々の学生のニーズや、大学および学生相談機関の特徴を適切に把握した上での、幅の広い、そして、より質の高い援助活動が求められているといえる。

(3) 課題

本研究では、相談内容および援助方法について初回面接時の内容を扱ったため、面接が継続し相談内容や援助方法が変化した場合については検討できなかった。とくに「心理面接（医療と連携）」による援助を行なった人数は面接経過全体としてカウントすれば増加し、面接回数との関係が多少異なってくることも考えられる。検討する目的にもよるが、継続した面接における相談内容および援助方法の分類の仕方には工夫が必要である。

また、本研究は相談内容や援助方法の分類に焦点をあてた研究ではないものの、相談内容や援助方法の実態を的確に把握するためには、池田ら³⁾でも指摘したように、より詳細な分類枠が望ましいと考えられる。相談内容に関しては、かなり広い内容を含む「進路修学」をどのように再分類するか、援助方法に関しては、学内外の他の相談窓口や教職員および専門家との連携・協働による援助活動など、従来の分類ではとらえきれない活動をどのように分類するかが、今後の課題であると考えられる。

文献

- 1) 鶴田和美. 学生相談. 下山晴彦編. 教育心理学Ⅱ－発達と臨床援助の心理学. 東京大学出版. 1998：237-257.
- 2) 藤原勝紀. 学生相談の大学における位置と役割—これからの学生相談像を求めて. 河合隼雄・藤原勝紀編. 学生相談と心理臨床. 金子書房. 1998：11-21.
- 3) 池田忠義・吉武清實・高野明・佐藤静香・関谷佳代. 学生相談における相談内容の特徴に基づく支援のあり方. 学生相談研究. 2008；28（3）：167-180.
- 4) 石谷真一. 面接継続回数から見た学生相談臨床の特徴. 心理臨床学研究. 1999；17（3）：251-272.
- 5) 渡辺未沙. 学生相談における中断と終結をめぐる一考察. 学生相談研究. 2005；26（2）：93-103.
- 6) 長田道. 学生相談における面接継続と期間について. 学生相談研究. 2008；28（3）：202-213.
- 7) 鶴田和美. 卒業期に来談した大学生の個別相談事例の全体像. 名古屋大学学生相談室紀要. 1992；4：3-20.

- 8) 森田美弥子. 学生相談のイメージと来談の関係. 心理臨床学研究. 1997 ; 15 (4) : 406-415.
- 9) 平成18年度新入学生意識調査. 東北大学学生相談所年報. 2008 ; 2 : 59-67.
- 10) 日本学生支援機構. 大学における学生相談体制の充実方策について ―「総合的な学生支援」と「専門的な学生相談」の「連携・協働」―. 2007.

付記

本研究は、東北大学高等教育開発推進センターの平成20年度高等教育の開発推進に関する調査・研究による研究成果である。

